

平成 25 年 1 月 28 日

「深層崩壊に起因する土石流の流下・氾濫計算マニュアル(案)」正誤表

(独) 土木研究所 土砂管理研究グループ
火山・土石流チーム

【訂正箇所】12 ページ 表-3

●誤

溪流名	発生年月	地質(参考文献)	崩壊土砂量	土石流の 到達距離	D_c
集川(熊本県)	2003年7月	熊本県, 2004	43,000 m ³	1.6 km	15 mm
大用知(徳島県)	2004年8月	田村ら, 2005	550,000 m ³	1.1 km	10 mm
片井野川(宮崎県)	2005年9月	鰐塚山山系土砂災害対 策検討委員会, 2006	910,000 m ³	3.6 km	50 mm

●正

溪流名	発生年月	崩壊土砂量	土石流の 到達距離	D_c	参考文献
集川(熊本県)	2003年7月	43,000 m ³	1.6 km	15 mm	熊本県, 2004
大用知(徳島県)	2004年8月	550,000 m ³	1.1 km	10 mm	田村ら, 2005
片井野川(宮崎県)	2005年9月	910,000 m ³	3.6 km※	50 mm※	鰐塚山山系土砂災害対 策検討委員会, 2006

※ 再現性の高い細粒土砂の最大粒径(D_c)50mmは、土石流発生前後のDEMの差分より主な堆積区間の末端と考えられた2.2km地点を土石流の到達距離として検討した結果である(参考資料3参照)。

【訂正箇所】23 ページ 巻末資料2 式6

●誤

$$\frac{\partial u}{\partial t} + u \frac{\partial u}{\partial x} = -g \sin \theta - \frac{\tau}{\rho_d}$$

●正

$$\frac{\partial u}{\partial t} + u \frac{\partial u}{\partial x} = -g \frac{\partial H}{\partial x} - \frac{\tau}{\rho_d h}$$

ここで、 H は水位（流動面標高）で $H = z + h$ である。

【訂正箇所】27 ページ 巻末資料5

●誤

C_{do} : 溪床堆積土砂の容積濃度

●正

C_{do} : 計画区間上流端における土石流中の粗粒土砂の容積濃度（≡崩壊土砂の粗粒土砂の容積濃度）